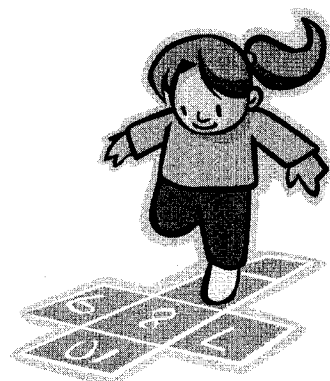


第V章

個別の指導計画をもとに本番開始 ～指導の展開～



この章では…

個別の指導計画にもとづいて実際の指導に入ります。いわば、個別の指導計画というシナリオをもとに、本番に挑むようなものです。さらに、日々の指導の振り返りや子どもの様子の記録は、個別の指導計画の短期目標、ひいては長期目標の評価につながる重要な役割を果たします。そこで、ここでは実際の指導および日々の評価におけるポイントについてみていきます。

● 指導の展開でのポイント



指導の展開でのポイントを挙げます。

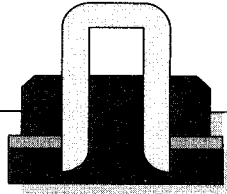
指導の展開でのポイント

- ①集中時間の配慮を行う
- ②無理のない課題配分にする
- ③抵抗感、二次的障害への配慮を行う
- ④動機づけを高める工夫をする
- ⑤有能感、達成感を味わえる工夫をする
- ⑥課題の正誤のチェック(記録・評価)を行う
- ⑦達成水準のチェック(記録・評価)を行う
- ⑧誤答の特徴のチェック(記録・評価)を行う
- ⑨課題の順序が適切であったかのチェックを行う
- ⑩手だての内容、量のチェックを行う
- ⑪指導前の仮説と整合性はあったかをチェックする

● このプロセスでとらえること ～「えがお君の場合」～

ここでは先のポイントにしたがって次のような内容をおさえます。

例)



個別の指導計画をもとに、いざ本番。

えがお君は、長時間集中するのが難しいので、10～15分ごとに課題が終わるようにし、気持ちの切り替えができるようにした。(←ポイント1)

作文指導を行う際は、漢字プリントの枚数を減らした。(←ポイント2)

不器用さもあるので、漢字については大まかに書けていればよしとした。このことについては、他の先生にも同じ対応をとってもらおう。(←ポイント3)

本人にも目標を伝え、自発的に取り組めるようにした。(←ポイント4)

3年生からの漢字を一覧表にし、練習した漢字にはシールをはって、達成度がわかるようにした。作文については毎回ファイルに閉じ、自分の作品の記録として蓄積できるようにした。

(←ポイント5) (その日の指導を終えて…)

正誤のチェックはできた。作文では、接続詞が使用できた否かのチェックも行った。(←ポイント6)

今日の評価では、3年生の漢字については、正答率は60%だった。漢字テストの漢字については、10問中8問正答することができた。前は難しかったが、今日は、指定された接続詞を使って12行の作文を書くことができた。(←ポイント7)

構成が複雑な漢字(例:業、漢)は難しかった。(←ポイント8)

作文は、指導の後よりも最初にもってきた方が集中して取り組めるようだった。

また、パソコンは後で導入しようと思ったが、同時進行で指導していてもよいかもしれない。

(←ポイント9)

漢字を覚える際、意味づけや形の言語化は効果があった。今までは、指導者の方でしていたが、本人自らできるかもしれない(支援の量を減らしてみよう)。作文については、原稿用紙のマスが小さいので、大きめのマスを用意する必要がある。(←ポイント10)

やはり、視覚的な認知の問題、目と手の協応の問題が、つまずきに大きく影響しているようだ。

作文についても、書く作業をパソコン等の代替手段で補えば、長い作文が書けるのではないだろうか。(←ポイント11)

● 指導の際の一般的な配慮

LD等の子どもたちへの支援を考える際、何か特別なことをしなければならないのではないかと
..と思いがちです。確かに特別な指導・支援・配慮がときに必要です。しかし、それが全てではあ
りません。日々なされている一般的な指導配慮でも十分に効果はみられます。これから挙げる指
導の際の配慮は、決して特別なものではありません。すぐにでも実践できる内容です。

□ 能動的な学習

子どもが自分から積極的にかかわっていくことができるような課題を取り入れます。
子どもに選択権を与える機会を指導・課題の中で作ります。

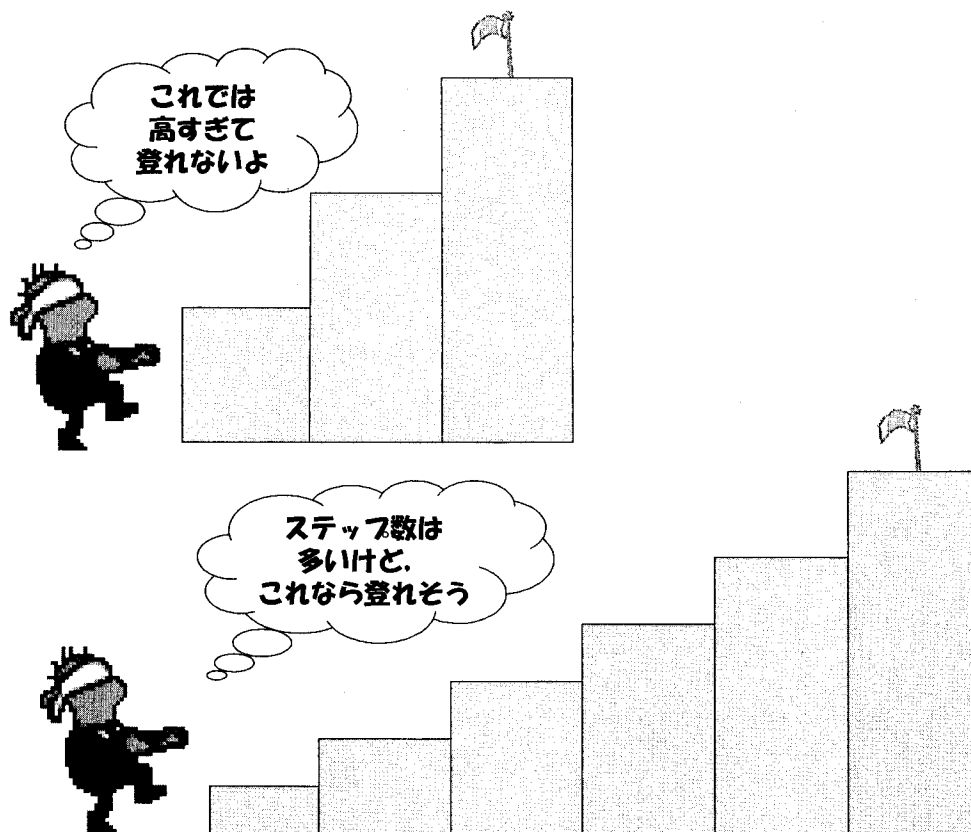
(例: 取り組むプリントの順序を決めてもらう)

▶ 子どもが責任感を抱くようになり、いつもよりねばり強く取り組む様子が見られ
ます。

□ スモールステップ

課題を(子どもに応じた適切な)段階に細分化し、着実にクリアーできるようにします。
その子どもにとって、難しすぎても、また簡単すぎても適当ではありません。

▶ たとえ、少しずつで着実に進むことができます。



スモールステップのイメージ

□ 即時フィードバック

子どもが行ったことに対し、即座に評価を返すことです。

LD等の子どもたちは、自分のことや、自分が行っていることに対して、正當に評価することが苦手な傾向があります。したがって、適切な自己評価の支援を行うことが重要です。

また、特に注意を持続することが難しい子どもについては、即座にかつ頻繁にフィードバックすることが効果的です。

➡ どういうことをするのが(+)で、どういうことが(-)なのかが、子どもにとって明確になります。

ほめられることで動機づけが高まります。

注意が逸れそうになるのを防ぐことができます。

□ 繰り返し

子どもが知識やスキルを獲得・安定するまで行います。

内容は同じでも、提示の仕方を変えるなどの工夫は必要です。

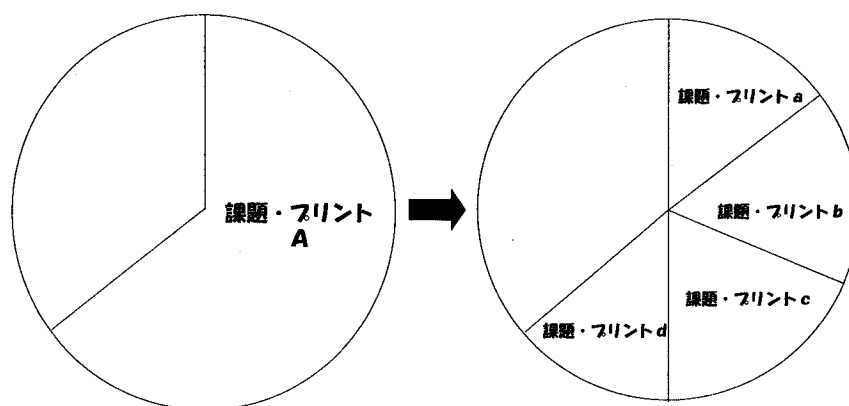
▶ たとえ少しずつでも着実に身につけていきます。

□ 集中時間の配慮

指導・課題中に、短く、多くの切り替えを入れます。

特に、注意を持続することが難しい子どもたちには不可欠な配慮です。

▶ 40分間ずっと集中することは難しくても、10分ずつ区切ることで、切り替えや気持ちの立て直しが可能になり、結果的に40分間集中できたのと同じになります。



集中時間の配慮イメージ

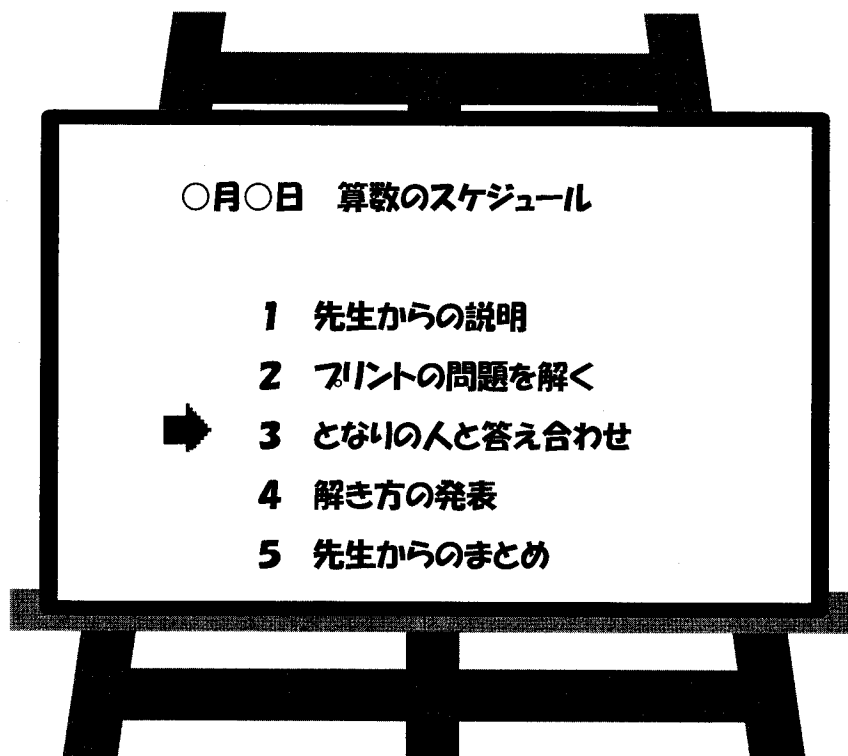
□ 行動の見通し

その時間内にどういうことをするのか、最初の段階で流れを説明しておきます。

今、どこを行っているのかがわかるようにしておくのもよいでしょう。

➡ **自分が今何をしているのかを確認しながら課題に取り組むことができます。**
見通しをもてないことからくる不安が解消されます。

どこまで集中していればよいのかが明確になるため、注意が持続しやすくなります。



行動の見通しをつけるためのスケジュール表



□ 約束を決める

予め子どもと約束ごとを決めておき、それを課題終了後に確認することはとても重要です。「発表の時間、1回は友だちに質問する」「プリント2枚を仕上げる」など、授業のはじめに確認し、終了時に評価します。

その際、子どもも自分の約束が守れたかどうかを評価します。このときの約束と、個別の指導計画の目標とを関連づけることもできるでしょう。

■ 約束があることで、子どもが自分をコントロールする力(セルフコントロール)が養われます。

他者から評価されることで、動機づけや有能感の高まりをみせたり、適切な評価への修正もなされます。

〇〇さんの約束	〇〇さんの評価	〇〇先生の評価
「発表の時間に1回は質問する」		

約束表

□ 予防的対応

子どもが何か適切でないことをした際「だめでしょ！」とマイナスの評価をするのではなく、適切な行動をしているときに「とても上手にお話しできたね！」「今日は、姿勢がとってもいいよ！」など、プラスの評価を行います。

子どもが何か適切でない行動をしそうな一歩手前の予兆を捉え、我慢できている状態に「それでいいんだよ！」と告げ、プラスの行動のレパトリーとして積み上げていきます。

➡ マイナスの評価をされるよりも、プラスの評価の方が、子どもにとって何倍も効果があります。

□ 二次的障害への配慮

本来のつまずきに対する誤った捉え方や対応により派生してしまった子どもの中の二次的障害(意欲や自信の低下など)を取り除くのは、大変なことです。本来のつまずきにアプローチするには、まず二次的障害を和らげることが必要になってきます。だからこそ、二次的障害をおこさないよう配慮する必要があります。

起きてしまった場合には、自信をつけること、「やればできるんだ！」「もっとやってみよう！」という気持ちをいかにもたせられるかがポイントになります。

➡ 二次的障害を和らげないことには、本来のつまずきへはアプローチできません。本人の得意なこと、現時点でできていることを尊重すると同時に、本人に合った課題内容(難易度)の設定を行い、有能感を高めていきます。二次的障害をクリアできると、子どもは驚くような力を発揮し始めます。

● 日々の記録の取り方

実際に日々の指導を終えた時点で記録をとることは重要です。課題の正誤のチェックをし、どういう内容の課題ができて、どういう課題は難しかったのかも記録しておきます。この際、特徴的な誤り、いつも同じようなパターンで誤るものについても記録しておくといでしょう。なぜなら、それにより、つまずきの背景要因がみえてきたり、次の指導・支援を考える際のヒントになるからです。

また、短期目標のところで達成基準の設定について述べました。このように短期目標の評価にもつながっていくので、達成基準を意識した(観点からの)記録も行う必要もあります。数値的な記録と、子どもの取り組んでいる様子や誤答パターンなどの記述的な記録の両方が必要でしょう。

子どもの名前		えがお 君		記載日	20△△年 5 月 10 日	記載者	〇〇〇〇
<長期目標> ① 「習った漢字を作文の中で使える」 ② 「長い作文を書くことができる」							
<短期目標> ①-1 「3年生の漢字100字(チェックリスト「悪〜研」)について、間違った漢字を示された際、その部分を修正できる (教師が作成した漢字テストで70%以上)」 ①-2 「クラスの漢字テストで毎回10問中7問は正解する」 ②-1 「指導者によるモデル作文を見た後、(指定された)接続詞を使って原稿用紙1枚分の作文を書くことができる」(同上)							
短期目標	具体的な課題(手だて)	達成度	習得している部分(+)	未習得の部分、誤りの特徴(-)	その他、特記事項		
①-1	「開〜客」10個の漢字の間違い探し (修正できなかつたものについては、指導者の方で、形の特徴を言語化する)	6/10	開、階、館、岸、起客 (以前「食」が修正できなかつたが今回は○)	寒、感、漢、期 (構成が複雑な漢字は難しい。細かい部分までみることができない)	練習した漢字にシールをはるのがうれしそう。		
①-2	明日の漢字テストのリハースアル。宿題に出しておいたテストに出る漢字10個のチェック (本番と同じ要領で行う)	9/10	「券」以外すべて (宿題の効果があつたようだ)	大まかな形としては捉えられていて、部分的に「刃」が「力」になつてしまふ等、細かい部分まで正確に書けない。視覚的な認知の問題と運動の問題、両方が考えられる。	不器用さの問題もあるのですが、本番のテストでもこの点について配慮する必要がある。		
①-2 ②-1	「しかし、けれども」など、逆接の接続詞を用いて作文する (書く前に本人に構想を話させる)	7行 接続詞の使用は○	指導者のモデルをみてすぐに構想が浮かんだ様子。内容も適切。以前学習した順接の接続詞も入れることができた。	時間がかかるため、内容的には完成していても、書き終わらない。習った漢字を積極的に使おうとするが、マス内に入らなかつたり、思い出すのに時間がかかつてしまふ。	パソコンの導入など代替手段の活用も考えていく必要があると思う。		